

目加田さくを先生の業績 4

— 『花萬葉』 (春～初夏の花) から —

前回に引き続き、『花萬葉』の目加田さくを先生の解説に導かれながら、万葉集の春の花と初夏の歌を見てみましょう。

【春の花】

春の花と聞いて多くの方が思い浮かべるのは梅と桜ではないでしょうか。前にも書きましたが、桜は万葉集 4500 首のうち 43 首で 4 番目です。意外ですが、桜が愛でられるようになるのは平安時代からのようです。梅は前回紹介しましたので、今回は桜を読んだ歌を紹介しましょう。

さくら

万葉集で歌われている桜は山桜です。そのまま愛でたり、山から掘ってきて庭に植えたりしたようです。

◇あはやまの さくらのなは きょうもかも

ちりみだるらむ みるひとなしに

(巻第十〇 一八六七)

(現代語訳文)・阿保山の 桜の花は、今日もかも

散り乱るらむ 見る人無しに。

(口語訳文)・阿保山の桜の花は、今日あたり

散り乱れていることであろうかなア。見る人も無しに。

◇はるさめは いたくなふりそ さくらばな いまだみなくに ちらまくをしも

(巻第十〇 一八七〇)

(現代語訳文)・春雨は いたくなふりそ 桜花 未だ見なくに

散らまくをしも

(口語訳文)・春雨はひどく降るな。桜花をまだ見ないに散らうことが惜しいよ

さくを先生は、桜の花は美しいが、咲くかたはしから散りかかる、それを惜しむ、散る相(すがた)の美しさを見極めていきますと表現しています。



令和3年3月18日 九州国立博物館にて

【夏の花】

最近温暖化が進み、4月から暑い日が多くなったような気がします。『花萬葉』には、夏の花として29種の花が載せられています。今回はかきつはた（かきつばた）を読んだ歌を紹介しましょう。

かきつはた（かきつばた）

◇あのみかも かくこひすらむ

かきつはた につらふいもは いかにかあるらむ

（巻第十〇 一九八六）

（現代語訳文）・吾のみや かく恋すらむ

かきつばた 丹つらふ妹は いかにかあるらむ

（口語訳文）・自分だけがこんなに恋しているのであろうか。

かきつばたのように美しい紅顔のあの子はどんなに

思っているのでしょうか。

◇かきつはた きぬにすりつけ

ますらをの きそひがりする つきはきにけり

(巻第十七 三九二一)

(現代語訳文)・かきつはた 衣に摺り付け

ますらをの 着そひ狩する 月は来にけり

(口語訳文)・かきつはたの花を衣に摺りつけて、

男子達が着飾って狩をする月はやってきたことだ。

さくを先生は、こう解説しています。「万葉人は湿地に生いしげって濃紫に咲きにおう花の中に分け入って、衣に摺りつけて、楽しんだようです。その美しさ故に「かきつはたにつらふ妹」とにおやかな恋人の美しさを表現しました。」

※現代語訳と口語訳は澤瀉久孝『万葉集注釈』中央公論社 昭和 35 年を参考



令和 3 年 4 月 2 7 日 福岡市植物園にて